

金相寺 寺報

遇

～ぐう～

Encounter magazine "Guu"



東京大空襲の様子（篠画伯作）

9月

September 2015

戦後70年特別号・No. 9

かみこ くじゅうねん
紙衣の九十年

親鸞聖人はおよそ八百年ほど前、京都に誕生され、九十歳でお亡くなりになりました。

その人生を通してお伝え下さったお念仏の教えは今もなお、人々の心に響き、生きる勇気と力を与え続けています。悪人正機説や肉食妻帯されたということで有名ですが、一体親鸞聖人とはどのような方だったのでしょうか。

ここでは親鸞聖人のご人生について共に触れていきたいと思えます。



● 関東での教化

流罪の地、越後での五年にわたる流人としての生活は、親鸞聖人を大きく変えたに違いありません。都とは比べものにならない荒れ果てた風土の中、親鸞聖人は民衆と向かい合います。そこで出会った人びとは、富や権力とは無縁に、人間の命を赤裸々に生きている人達でした。そこには、善根を積むどころか、生き延びるためには、たとえ悪事とされていることでも、あえて行わなければならぬ悲しさを抱えた人びとの生活がありました。越後の厳しい自然の中で、そのようにたくましく生きる庶民と共に、さまざまなことを学びました。また、流罪中に恵信尼さまを妻にむかえられ、やがて男女六人の子女をもうけられました。

建暦元年（一一二一年）十一月十七日、法然一門の流刑が解かれました。法然上人は京都に戻られてすぐ、かねてからの病によって東山大

谷でお亡くなりになりました。

親鸞聖人は越後から常陸に移り、以降二十年の間、関東に留まって教えを広められました。その間に『顕浄土真実教行証文類』（教行信証）の執筆を始められたと伝えられています。執筆を始めた頃、京都では再び専修念仏の弾圧が行われていました。法然上人のお墓は破却され、『選択本願念仏集』の板木の消却がされ、弾圧によって専修念仏信仰の芽が次々とつみ取られていくのでした。親鸞聖人は関東において処罰を逃れましたが、その悲しい知らせを聞くにつれ、『教行信証』執筆の意欲は一層増大したことであります。



を述、作撰地、製をるの本来『教行信証』の草稿を信草伝草行しとの教始た田開し稲



【慙愧】

現在日本人の平均寿命は、八十歳を越えていると聞くが、能楽の『幸若舞敦盛』に「人間五十年、けてむの内をくらぶれば、夢まぼろしのごとくなり、一度生をうけ、めっせぬ者のあるべきか」と謡われている。人生五十年といわれた時代は、七十歳は「古希」、古来稀なりで、七十迄生きる人は鮮すくなかつたと思われるが、その古希を愚生は既にすぎている。孔子は「七十にして意の如く行えど矩を踰えず」と言われた。若い頃、此の言葉を聞いたときは、孔子と云う人は「長生きされ、歳も稀なら人格も稀な立派な人物」と云った程の印象であったが、自身が七十と云う「自在従心」の歳に至って、改めて思うことは、孔子と云う人は「立派

な人格者」と云った表現では云い表わせない偉大なる人格に、ただただ頭が下がるばかりである。

歳をとると夜、寝付きが悪くなる
と聞いていたが、愚生も御多分に洩れず、近頃は夜床に就いてもなかなか眠れず、眠れぬままにそこはかと無く今迄の人生が走馬灯の如く蘇り、何と穢悪な人生を歩んで来たことかと、戦慄するとともに現在の老軀に気付かされ、愕然とさせられる。「呉下の阿蒙」と云うが、歳は重ねたが人間的には何等成長を見ない。『法句経』であつたか、「老いること牛の如し。その肉は増せど智は増すことなし」。肉体的劣化は当然なれど、人間の劣化は恥ずべきことである。今、自身を省みて、此の恥ずべき劣化が著しく、ただただ情けなく悲しみに沈む。こんな思いに心閉ざされると

生死大海ノ船筏ナリ
罪障オモシトナゲカザレ

(『正像末和讃』)

此の御和讃を何度も何度も心の中に戴くのであるが、すると不思議としか云い様がないが、全く情けない愚鈍の身をも常に照らして捨て給わぬ御仏の慈光を感じ、無上の喜びが湧き出て、心安らぎ救われるのを常とするのである。

中国唐の時代に鳥窠道林禪師と云う方がおられた。「鳥窠」とは鳥の巢のことで、道林禪師は高い松の木の上の鳥の巢の様な処で修行されていた。その噂を聞いて詩人として有名な白居易(白楽天)が態々尋ねて行き、頭上の禪師に「その様な処に居て危なくないですか」と声をかけた。すると禪師云わく「そなたこそ大地に居て安全と思つているのだらうが、かえって危ない危ない」と返つて白居易に注意を促した。それを聞いた白居易は「これは徒人に非ず」と思

無明長夜ノ燈炬ナリ
智眼クラシトカナシムナ

い更に尋ねた。「仏教の大意は如何なるものか」と。すると禪師は即座に

諸悪莫作 修善奉行
自淨其意 是諸仏教

と応えられた。これは『七仏通戒偈』と云う有名な偈文であるが、これを聞いた白居易「その様な教えは三歳の童でも知っている」と禪師を詰問した。そこで禪師は「三歳の童でも知っている」と云うが、七十の翁と云えども行じ難いのだ」と。そこで白居易は「慥かにその通りだ」と頭を下げてその場を退いたとの逸話がある。

「諸悪莫作」(諸の悪をなすなかれ)、この悪について仏教では十悪(殺生・偷盜・邪姪・妄語・綺語・悪口・両舌・貪欲・瞋恚・愚痴)が説かれてある。愚生の日常は此の十悪そのものであり、諸仏の教えとされる「諸悪莫作 修善奉行」を真摯に受け止めるとき、愚生が如き劣悪な者は一

日たりとも生きられぬ。さすれば愚鈍なる身には救いの道は鎖されてしまうのかと、仏の袖に縋る思いをなせば、み仏は捨て給わず、『涅槃経』に

二の白法有り。能く衆生を救う。
一には慚、二には愧なり。く乃
至く慚は人に羞じ、「愧」は天に
羞ず。是を慚愧と名く。慚愧無
き者は名けて人と為さず。名け
て畜生と為す

と。如何なる行も及び難き愚鈍の身にあつても、慚愧の心が人を救うと説き示されてある。「人に羞じ天に羞じる」と云うことは、人であるなら人としての恥を知れと云うことか。

「外面似菩薩 内心如夜叉」と云うことがある。外見は人間でも、吾人の身口意の三業は、人間の用き^{はたら}を為しているか。常に注意を払う必要がある。仏教では「十界互具」と云うことを説く。「六凡四聖」、地獄・

餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六凡と声聞・縁覚・菩薩・仏の四聖、合わせて十界。この十界が互に他の九界を具足していると云う。人間は十界の地獄から数えて五番目にあるが、しかし、地獄餓鬼の性も具足している。



地獄絵図

若し現代人が地位や名誉、財産のみを追い求め、その為に他人を思い遣る心を失っているとしたら、如何に外見は紳士淑女を気取ったところで、それは畜生以下の地獄餓鬼の世界に生きていると云わなければならない。

地獄は言葉の通じない互に唾み合う世界。餓鬼は利己的欲望のみに生きる世界。人間界は言葉の通じ合う世界である。しかし現今は政界をはじめ、あらゆる処で言葉が通じず、混乱を招いているのではないか。だとすれば、人間崩壊の時代と云わなければならぬ。

蓮如上人は『御文』の中で

八万の法蔵を知るといふとも、
後世を知らざる人を愚者とす。
たとひ一文不知の尼入道なりとも、
後世を知るを智者とすと云へり

と仰せられている。ここに「後世を知る」とは「己を知る」と愚生は理解している。「あらゆる学問を身につけたとしても、己を知らぬ者は尤も大事なことを知らぬのだから、愚者としか云わざるを得ぬ。文字一つ分からぬ者でも、己を知る者は智者なのだ」と、「燈台下暗し」、世に知識

人と云われる人程己を知らぬのではないか。親鸞聖人も

善^{よし}悪^{あし}の文字をもしらぬ人はみな

まことのこころなりけるを

善悪の字しりがほは

おおそらごとのかたちなり

(『正像末和讃』)

と仰せられてある。

先の『涅槃經』の「能く人を救ふ」と云う「慚愧」は、己に覚めずして生じ得ない心である。自分の力で自分を知ることは、自分で自分の身を持ち上げんとするが如く、不可能なことである。仏のみ教えを鏡として己を知る以外に己を知る道はない。

愚^{おろ}身を念^{おも}うに「悪を止め善を修する」の道は、及ぶべくもなく「罪業深重なりとも慚愧の心をもて」とのみ教えも、無慚無愧の身には如何にせん。ここに至って、まことの救いの方向に惑う愚生の身にも至り届いて下さるのは「ただ念仏」のみ教え

である。

無明煩惱でしかない吾人に如何なる道が救いとなるのか分別せんと計らうことこそが迷妄の極であった。

生きとし生ける凡てのものが平等に救われる絶対無限なる真実清浄の世界（浄土）から、荒れ狂う果てしなき生死海に溺れ惑う我ら凡夫を救い摂らんと、言葉となつて手を差し延べてくださる延びてある、それこそが「南無阿弥陀仏」の六字名号である。その呼び声に全身で悲喜の涙とともに「南無阿弥陀仏」とお応えするばかりである。「ナムアマミダブツ ナムアマミダブツ」

成田 宣信（金相寺住職）



副住職の

日々の出遇い



●夏の子ども会「報告」

当寺、夏の恒例行事「金ピカキッズ・夏の子ども会」を七月三十日（木）に開催いたしました。

今年には戦後七十年という区切りの年でもあります。そこで、二年前に引き続き、今年も当寺責任役員の篠さんに体験談をお話いただきました。戦後七十年が経ち、当時を知る人達も少なくなりました。子ども達はもちろん、その親、更には祖父祖母の世代ですら実際の体験をした方はほとんどいません。

そんな中、私たちに今求められていることは、人が人を殺める戦争について、また戦争を引き起こす私たち人間一人ひとりの在り方について、世代を超えて共に学び語り合っていくことではないかと考えます。

今回は篠さんをはじめ、参加者の方々にも感想を書いていただきましたのでご紹介いたします。

篠さんの戦争のはなし

小三 板橋春香さん

最初私は国と国のケンカが戦争だと思いました。

私が一番心に残ったのは、爆弾が三種類あるということです。一つ目は大きな穴を開ける爆弾です。二つ目は火をつけるための爆弾です。三つ目は爆発させるための爆弾です。篠さんのお家は大きな爆弾が落ちてなくなってしまったそうです。死んでしまつて倒れている人がいたので、避けて必死に逃げていたそうです。私はそんなに怖いことを想像できませんでした。わざと不審者に殺された人も、戦争で殺されたのと少しだけ同じに思えました。

戦争体験をした人が減っていくと、怖さを知っている人が減っていくと思います。私にも子どもができれば、子どもにも伝えていきたいと思いません。

篠さんの戦争のはなし

小一 板橋京香さん

最初におつとめをしました。なかなか読めませんでした。

空が見えないぐらい飛行機がいたと言っていました。篠さんのおはなしは難しかったです。飛行機が爆弾を落としてお家が焼けたり、お父さんとお母さんがいなくなったりしたのはびっくりしました。

バケツの水を頭からかぶって逃げたと言っていました。本当に怖かっただろうと思いました。ラジオを真ん中に置いて、人間が下を向きました。周りは何もなくなっていました。

戦争は怖いと思います。これから来てほしくないです。



戦闘機と爆弾

篠さんのお話を聞いて思ったこと

小五 成田亮真くん

僕が子ども会で戦争の話を聞いて思ったことは、七十年前に戦争をしていなかったらよかったのにも思いました。なぜかというところ、子どもなどは今もおじいさんになってまだ生きていたかもしれないし、その時代に殺し合いをしなくてよかったからです。

でも、その時代に戦争がなかったら、今やっていたかもしれないから、もう戦争はしない方がいいと思います。



お話の後も、描いてきてくださった絵を見せながら子ども達や親御さん達にいろいろなお話や説明をしてくださった篠さん

子ども会に参加して

保護者 中村貴子さん

今回の子ども会のテーマである「戦争と平和」について篠さんからお話を聞き、改めて平和な時代に生かされていると感じました。篠さんは防空壕の中で空襲が終わるのをじっと待っていてとても怖かったとおっしゃっていました。また、食べ物がなく、米兵の車から投げられる物を食べていて、ある時は歯磨き粉も食べ物だと思って舐めていたとおっしゃっていました。

最後に「戦争孤児」の新聞記事を読んでもう一度読んでいた途中で「もうこれ以上は・・・」と言葉を詰まらせていた篠さん。

自宅に帰ってから早速子ども達とお話をしてみました。兄弟それぞれ篠さんの絵やお話で何かを感じ取っていたようで、兄は「戦争って怖いね。これから先にそんなことがあったら絶対に嫌だね」と言っています。弟も「僕たちが生きています」

すごいことなんだよね。大事にしなきゃいけないんだよね」と言っていました。



米兵から投げられた食べ物を奪い合う人たち

毎年参加させていただいている子ども会。子どもにとっても親にとっても、大切な時間となっています。参加させていただきました、貴重なお話をありがとうございました。



沢山の体験や今の思いを語ってくださった篠さん

私と東京大空襲

篠正美氏

「篠はおるかっ！」「篠はおるか？」

暗闇の中で家族の消息を探し廻る長兄（中学二年）の声でした。多分、学校で日頃訓練されているだろう軍隊風の口調であった。体の不自由な高齢の祖父を取り敢えず自宅近くの空き地へ戸板を担架代わりにして次兄（国民学校六年）と二人で避難させた後、母と私の居る明大駅近くにあった競馬場（軍馬の訓練場と当時云われていた）で落ち合うことができた。校庭ほどのそこは避難する人でごったがえしていた。

忘れもしない、私の国民学校二年時の一九四五年五月二四日夜遅くという記憶がある。第三次と云われた「東京山の手大空襲」の日のことである。

当時の人々の多くは、当時梅ヶ丘駅近くの根津山（現、世田谷区立羽根木公園）にあった陸軍の高射砲陣

地方面に避難した。殆どの家族がそうであったように、我が家も父の召集で母子世帯であり、そういう状況の中、母も兄を頼りにしているようだった。「死ぬ時は母子おやこ一緒よ」といつも母は云っていた。

「競馬場方面がよい」という兄の一言が生死の境になったことを後になって母から聞いた。根津山方面に避難した近所の知り合いの多くの人が犠牲になった。焼夷弾による家屋の炎上で、その熱さに耐えられず、逃げる途中の家の防火用水の水を冠り、座布団のような分厚い防災頭巾を濡らす。これを何度も繰り返しした。住宅街の道筋には焼死体が幾重にも転がり、それらの遺体を踏み越えて逃げた。確か翌早朝だったと思う。空襲警報解除のサイレンに安堵した。所々焼け残った家々の間を通りぬけ、家路についた。途中から風景が一変し焼け野原となり、我が家も消失していた。遙か離れた新宿伊勢丹の残骸のみがあった。母が大きく泣

き崩れたのを覚えてる。こうして八月十五日は正后を迎える。

焼け野原に粗末な台と、その上ラジオを置き、囲むように近所の人々と直立不動の姿勢で玉音放送を聞いた。大概の人が泣いていた。自分にはなぜ泣いているかが理解できなかった。

以降七十年間、日本は平和と民主主義の理念を守り続けてきた。NHKが民放か定かではないが、極最近、第二次世界大戦の報道番組での視聴者アンケートで、二〇代の若者の声として「毎年夏になると戦争の暗い話題ばかりで嫌になる」というテロップが流れた・・・。



玉音放送時の様子

子ども会後記

戦後七十年という時間を考える時、たった七十年という一世紀にも満たない間に、日本は随分と変わったのだなど、改めて感じました。いつも優しくにこやかに接してくださる篠さんが、まさか少年期にそんな悲しく恐ろしい体験をされていたとは誰が想像できるでしょうか。今、平和で豊かな生活が送れていることが、いかにありがたく大切なことであるのかを教えていただきました。そんな中、ふと京都でお世話になった竹中先生のお言葉が思い出されます。

(仏道は)「罪悪深重の身」を自覚的に受け止めて、どう生きていけばよいのかを問うことから始まることになる

戦争問題も含め、様々な問題や課題

とぶつかったとき、一番大事なことは自らの問題としてどのように向き合い、どう生きていくべきなのかを問うことではないでしょうか。

私自身の在り方とは、自己中心的に様々な問題に対して無関心、または他者批判ばかりしている、いかにも無責任、無自覚な在り方だったことに気付かされます。自らの問題として、向き合い、受け止め、どう生きていくのかが問われているのです。今回はそういったことを教えていただく大変貴重な場となりました。ただ、大変貴重な場となりました。お忙しいなか、お話をくださった篠さん、そしてご参加くださった皆さん、本当にありがとうございます。改めて共に学び語り合う場の大切さを教えていただく貴重な機縁となりました。

次回の子ども会は青年会と合同で十一月頃に親鸞聖人ご命日のつどい「報恩講」を開催いたします。皆さんのご参加お待ちしております。

今後の予定

法要

九月二十三日 秋彼岸会

十一月九日 報恩講

勉強会など

十月十一日 午後二時

正信偈を学ぶ会（輪読・座談会）

※ 偶数月（二、四、六・八・十・十二月）の第一土曜日に開催予定。

十一月十一日中（詳細未定）

子ども会・青年会報恩講

※ 詳細はホームページをご覧ください

毎月一回 仏教青年会

※ 毎月の開催日等、詳細はホームページをご確認いただくか電話・メールにてお問合せ下さい

予定は都合により変更する場合がございます。詳細は随時ホームページをご確認いただくか、電話・メールにてお問合せ下さい

【お知らせ】

この度、FAX番号・Eメールアドレス・ホームページURLが変わりました。それに伴いホームページをリニューアルいたしましたので是非御覧ください。

編集者雑感

先日、青年会のある参加者から、仕事の都合で遠方に引っ越しすることを伝えられました。その方は青年会を立ち上げる大きなきっかけを作ってくれた大切な友人です。毎回ご夫婦でご参加くださり、これまでずっと青年会を支えてきてくれました。その彼の報告を聞いた時、新たな地で頑張っていて欲しいという気持ちと共に、とても寂しい気持ちにもなり、また青年会を今後も続けていく力を失ったような気がしました。

しかし、そんな私に対しその彼は「同世代の仲間が共に語り合えるこの場合は、とても素晴らしい場ですね。必ずまた来ます」と言ってくれたのです。

様々な仲間を支えられてひらかれている場の大切さ、素晴らしさを改めて教えていただきました。そして、彼がいつでも戻ってこられるよう、今後も仲間たちと共に青年会をひらき続けていこうと強く感じました。

『遇ぐぐう』第九号

発行 浄土真宗 霊苔山 金相寺

副住職 成田 宣明

〒252-0328

神奈川県相模原市南区麻溝台726-1

TEL 042-778-2879 / FAX 042-711-8257

e-mail info@konsouji.com

URL <http://www.konsouji.com/>

発行日 二〇一五（仏歴二五五八年）年九月一日